

オンラインによる第二外国語教育の可能性と課題 — 初級「韓国語」授業実践を例に —

ヤン・ジョンヨン

Possibilities and Challenges of Online Second Foreign Language Education

A Study with a Practical Example of a Beginner's Korean Language Class

YANG Jung-yun

要 旨

本稿は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響による授業のオンライン化・遠隔化を余儀なくされる中で、筆者が担当する第二外国語科目の初級「韓国語」教育を例に、従来の対面型授業からオンライン型授業に移行するにあたってのコースデザインの見直しの経緯、および、オンライン型授業の実践例を報告しながら、オンラインによる第二外国語教育の可能性と課題について考察するものである。

キーワード：オンライン授業、第二外国語教育、韓国語、受講環境、授業の進め方

Abstract

Coronavirus disease 2019 (COVID-19) has forced teachers to give online class or teleclass to students. This paper shows the process to revise the course design for a shift from the conventional face-to-face class to online class, and the practices of online classes using the author's Korean language class for beginners as an example to discuss possibilities and challenges of online second foreign language class.

I. はじめに

2020年3月から4月にかけて、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による授業のオンライン化・遠隔化が様々な教育機関で次々と決定された。これを受けて、多くの大学では当初予定していた「対面型」での授業の形態、内容、資料・教材、時間数、評価方法などを、短期間で「オンライン型」に変更しなければならなくなった。日本の教育機関での新学期開始にあたる4月ということもあり、教員、教務課などの職員、学生はそれぞれに混乱した状況にあった。特にオンライン型の外国語教育は、多くの教員、学生にとってはあまり経験がなく戸惑いの声も聞かれた。さらに、英語のように既に学び始めている言語であればまだしも、大学で初めて学ぶ「第二外国語」となると、2つの初めてが重なるので、さらにハードルが上がる。不安なのは、学生だけではなく教員も同様で、筆者はコースデザインを再構成するにあたり、参考となる先行研究や先行事例にあたろうとした。しかし、「第二外国語」または「オンライン型」のいずれかの研究や実践事例は少なからずあるものの、「第二外国語」かつ「オンライン型」の2つが揃う条件となると、参考となる先行研究や先行事例はほとんど見つからなかった。従って、先例のほとんどない中で、筆者なりに蓄積のある「第二外国語」教育を軸にして、「オンライン型」授業の特徴を考えながら両者を融合していく方法を取ることにした。

本稿は、上記のような状況において、筆者が担当する第二外国語科目の初級「韓国語¹」教育を例に、従来の対面型授業からオンライン型授業に移行するにあたってのコースデザインの見直しの経緯、および、オンライン型授業の実践例を報告しながら、オンラインによる第二外国語教育の可能性と課題について考察していくものである。構成としては、まず次のⅡ章で従来の対面型授業での第二外国語「ハングルⅠ」の概要について概観し、続くⅢ章でオンライン型の授業に対応するための「受講環境」の制約とそれに伴う「授業内容」の変更についてまとめる。そして、Ⅳ章でそれらを踏まえたオンライン授業の構成を提示し、Ⅴ章ではオンラインによる第二外国語「ハングルⅠ」の教育実践例を報告しながら、オンライン型の第二外国語教育の特徴や問題点・課題などについて考えていく。最後に、Ⅵ章でオンラインによる第二外国語教育の可能性と課題についてまとめた。

本稿での研究は、現時点では、十分な時間がないため考察の深度や実証データの数や質にも偏りがあると思われるが、Tipsの一つとして、速報性、即時性を重視した。現状では実践報告的なものであるかもしれないが、第二外国語「ハングルⅠ」をオンライン型の授業に変更するために、何を優先し、何を削り、何を加え、何を維持したのかについての教育実践事例の一研究として、オンラインによる第二外国語教育に携わっている方々の一助となれば幸いである。

Ⅱ. 対面型授業：第二外国語「ハンゲルⅠ」の概要

ここでは、2020年度当初予定していた対面型の「ハンゲルⅠ」の「授業の目的」と「到達目標」について確認する。まず、『履修要綱』での「シラバス」では字数や形式に制約があり詳細には書いていないが、この授業のシラバスと教室活動の特徴について述べる。

Ⅱ（１）シラバスの特徴（「スケジュール」の記述）

入門期の初級レベルではあるが、各回の内容は「能力記述（Can-do）」により示している。これは、この授業の目標が単なる言語知識の獲得ではなく、それを基にした「課題遂行能力」の育成を目指しているためで、学生にはその課で「どんなことができるようになるか」を意識してもらおうという狙いもある。たとえ同じ言語知識を扱うにしても、それを使って何ができるようになるのかが見えるのと見えないのとでは、学習の意欲や動機づけも違ってくる。例えば、指定教科書の第3課のタイトルは「それは何ですか?」、第6課は「週末は何をしますか?」となっている。しかし、このままでは使用場面やこの表現を使って何ができるかが意識にくい。そこで、この授業では、教科書第3課を扱う第7回を「メニューを指さして、中身や数量、有無などを確認しながら注文することができる」とし、6課を扱う第10回は「日常生活（一日のスケジュール）について話したり聞いたりすることができる」としている。このように、シラバスの「スケジュール」に記したそれぞれの回の主な内容は、すべて「Can-do」で示している。

Ⅱ（２）教室活動の特徴

『履修要綱』の「シラバス」では記載箇所がないため明示していないが、この授業では、「Task-based Language Teaching（タスク重視の教授法＝TBLT）」を念頭に置いた教室活動を行っている。これは、課題遂行能力は、基本的な言語知識の学習や反復練習だけでは身につけにくく、学習項目である「Can-do」を具体的に「タスク」として言語行動化し、そのタスクの達成により育成されていくと考えられるからである。TBLTでの評価は、単語をいくつ覚えたか、正しい活用が選べるか、語句の穴埋めができるかなどといったいわゆるペーパーテストによって測られる言語知識によるものではなく、タスクを達成できたか否か、また達成できた場合、どれだけうまく達成できたかで測られる。従って、評価についても「ロールプレイ」「インタビュー」「シミュレーション」などTBLTに沿ったものを取り入れている。

Ⅱ（３）当初予定していた対面型授業「ハンゲルⅠ」の「シラバス」

当初予定していた「対面型」授業の「シラバス」では、『履修要綱』の形式・書式にあわせて、また、学生にわかりやすいような表現を用いて、【目的】と【到達目標】を以下のように記述した。

表1 当初の対面型授業「ハングルⅠ」の【目的】と【到達目標】

<p>【目的】</p> <p>本授業は、韓国語を運用するために必要な基礎的な言語知識を学びながら、身近な話題（あいさつ、日常生活や学校生活、買い物や店での注文、好きなものごとなど）について伝え合えるような韓国語能力を養うことを目的とする。</p> <p>そのため、必要不可欠な文法規則はもちろんのこと、できるだけ自分にかかわる語彙数を増やし、その場に合った言い方（定型表現）の習得を目指す。また、表記に関しては、初回から4回目までにハングル文字の読み書きを身につけることを目指す。</p> <p>教室活動では、実際に韓国語を運用できることを目的としているため、ペア練習など応用練習を多く取り入れる予定である。</p>
<p>【達成目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・韓国語の基本語彙や定型表現を用いながら、口頭でのやりとりを中心に、それを文字でも理解・表現できる。 ・母音と子音、合成母音、パッチムなどの韓国語のハングル文字の仕組みを理解し、読み書きができる。

この【目的】と【到達目標】は、授業の根幹をなすものであり、オンライン化によるコースデザインの見直しの際にも変更しないこととした。一方、変更が生じたのは、表2に示す【授業スケジュール】である。グレーの部分の第13回～第15回は、授業の12回化に伴いそのままの形では行えなくなった。

表2 当初の対面型授業「ハングルⅠ」の【授業スケジュール】

回	主な内容
第1回	ガイダンス／韓国語とは／ハングル①：母音
第2回	韓国語であいさつをすることができる／ハングル②：子音1
第3回	自己紹介（職業、所属、専攻など）をすることができる①（教科書：第1課）／ハングル③：子音2、パッチム
第4回	自己紹介（職業、所属、専攻など）をすることができる②（教科書：第1課）、先生の自己紹介を聞いて理解することができる（教科書：第2課）／ハングル④：合成母音
第5回	友人や家族を紹介することができる①（教科書：第4課） ハングルのまとめ：自分やクラスメートの名前をハングルで書いたり読んだりすることができる
第6回	友人や家族を紹介することができる②（教科書：第4課）
第7回	メニューを指さして、中身や数量、有無を確認しながら注文することができる（教科書：第3課）
第8回	部屋や教室、学校内のどこに何があるかについて話したり聞いたりすることができる（教科書：第3課）

第9回	近隣施設の名称や所在地について、話したり聞いたりすることができる（教科書：第5課）
第10回	日常生活（一日のスケジュール）について話したり聞いたりすることができる①（教科書：第6課）
第11回	日常生活（一日のスケジュール）について話したり聞いたりすることができる②（教科書：第10課）
第12回	週末の過ごし方（一日のスケジュール）について話したり聞いたりすることができる （教科書：第6、10課）
第13回	一週間の生活行動（何曜日・何時に何をするか）について話したり聞いたりすることができる （教科書：第7課）
第14回	夏休みの予定（移動手段や交通費など）について話したり聞いたりすることができる（教科書：第8課）
第15回	地元について簡単に紹介することができる（教科書：第9課）

当初、第13回から第15回で扱う予定であった学習項目は、教科書の7課、8課、9課にあるものであるが、その語彙、表現、文法の一部は、1回目から12回目の内容に取り入れることとした。もちろん、すべての内容を分散させることはできないが、重要な言語知識である7課の動詞や助詞（から、まで）、8課の漢字語数字や疑問詞（いつ）、9課の動詞やヘヨ体の作り方は扱うこととした。活用の作り方などは例年一度学んだだけでは定着しにくいので、「ハンゲルⅡ」で復習を兼ねてもう一度詳しく扱うこととした。

次章では、コースデザインの変更を考える際に考慮すべき2つの条件について述べる。

Ⅲ. オンライン型の授業に対応するための2つの条件

オンライン授業に影響を与える条件には様々なものがあると思われるが、ここでは2つの側面を取り上げたい。一つは、外的な側面である「受講環境」、すなわち、インターネットなどの通信環境および学生と教員が使用可能なデバイスやツールの制約などであり、もう一つは、内的な側面である「授業内容」に関わる授業の目的と到達目標、教科書、回数制限などである。以下のⅢ（1）、Ⅲ（2）ではこれら2つの条件について述べる。

Ⅲ（1）受講環境を考慮した授業スタイル

◆受講環境に関するアンケート

初回の授業時に受講環境に関するアンケートを行なった。これは、2回目以降の本格的なオンライン授業の開始に向けて受講者の「レディネス調査」を行うためのものである。以下の表3は8つの質問および選択肢、回答結果（人数（割合））である。本授業の履修登録者40名のうち36名の回答が得られた。なお回答の太字・ゴシック体は、筆者がオンライン授業を行う上で制約となると判断したものである。

質問 1	この授業はどこで受講していますか？
回答 1	①自宅・自分の部屋 (32名 (89%))、②自宅共有スペース (4名 (11%))、 ③インターネットが使えるお店 (0名 (0%))、④その他 (0名 (0%))
質問 2	この授業で使えるデバイスは何ですか？ (複数回答可)
回答 2	①パソコン (34名 (79%))、②スマホ (8名 (19%))、③タブレット (1名 (2%))、④その他 (0名 (0%))
質問 3	自宅はインターネットが使える環境ですか？
回答 3	①使える (36名 (100%))、②使えない (0名 (0%))
質問 4	自宅のインターネット接続方法は何ですか？
回答 4	①光回線 (22名 (61%))、②ポケットWi-Fi (5名 (14%))、③ケーブル (1名 (3%))、 ④ADSL (1名 (3%))、⑤テザリング (0名 (0%))、⑥わからない (6名 (16%))、⑦その他 (1名 (3%))
質問 5	インターネット環境の状態はどの程度ですか？
回答 5	①動画を見るのに十分である・動画をストレスなく見ることができる (30名 (83%))、 ②動画を見るのに十分ではないが、混雑時を除いて問題がない6名 (16%)、 ③動画を見ると常に遅いが、動画以外は問題なく閲覧できる (0名 (0%))、 ④動画を見ると常に遅く、動画以外のWebページの閲覧も遅い (0名 (0%))、⑤その他 (0名 (0%))
質問 6	授業を受けるためのデータ通信 (インターネット環境) に不安はありますか？
回答 6	①まったくない (14名 (39%))、②ほとんどない (19名 (53%))、③少しある (6名 (8%))、 ④とても不安だ (0名 (0%))
質問 7	自宅にプリンターはありますか？
回答 7	①プリンターを持っている (23名 (64%))、②プリンターを持っていない (13名 (36%))
質問 8	以上の状況を踏まえて、この授業をオンデマンド (動画配信型／Tamsに動画をアップ) をメインにするのではなく、リアルタイム (同時配信型／Teamsの会議やzoom) をメインにした場合、参加可能ですか？
回答 8	①はい (35名 (97%))、②いいえ (1名 (3%))

※ 回答の太字・ゴシック体は、筆者が制約となると判断したもの。

上記のアンケートの結果を踏まえて、どのように授業スタイルを決定したかについて述べる。

オンライン型の授業に対応するための2つの条件のうち、外的な側面の「受講環境」において、すべて回答者が「自宅はインターネットが使える環境 (回答3-①)」であり、「インターネット環境の状態も概ね良好 (回答5-①②)」であった。つまり、オンデマンド動画配信とリアルタイム通信のいずれにも対応できると判断された。

一方で、通信状態に問題がないと答えたのに、授業を受けるためのインターネット環境に不安はある (回答6-③) という回答があるのは、はじめてのオンライン授業でまだ不安な気持ちを抱えていたからであろうと推察された (これは教員も同じであった)。よって回答6-③は授業スタイルの決定に影響しないと判断した。

「自宅にプリンターがあるか（質問7）」については、資料やワークシートなどの配布や回収で配慮が必要であると思われた。事前に配布したとしても使用デバイスが2つ以上でないと手元に資料がない状態での受講となり、また、ワークシートに記入して提出するといった活動を取り入れにくい。これは、オンライン授業である場合は常に起きる問題である。LMS（学習管理システム Learning Management System）資料などを配信して授業の前後に閲覧・ダウンロード可能にしておくしか方法はないと思われる。

「受講場所はどこか（質問1）」に「自宅の共同スペース」という回答もあることから、家族がいるところが画面に写るなどのプライバシーに関することへの配慮が必要である。

「授業をリアルタイムにしても参加可能か（質問8）」に「いいえ」が1名いることに関しては学生の好みの問題で、授業スタイルの決定に影響しないと判断した。

上記の内容を踏まえると、（1）通信環境に問題がない、（2）資料配布と回収に配慮する、（3）学生側のカメラやマイクをオフにし、必要に応じてオンにして使用することができればリアルタイム通信型授業も可能であると判断された。語学の特性上、授業参加者間のインタラクションを持ち、また、フィードバックのタイミング（質と量）を保持できるので、2回目以降はリアルタイムで行うことにした。

◆オンライン授業のスタイル

アンケートから得られた受講環境条件を踏まえ、実際にこの授業ではどんなスタイルが相応しいか考えるにあたって、オンライン授業の4つのタイプを考慮とした。オンライン授業は大きく「オンデマンド型（非対面・非同期＝OD型）」と「リアルタイム型（オンライン対面・同期＝RT型）」に分けられるが、さらに使用ツールの違いによって、以下の表4のように、4つのタイプ（①～④）に分けられる。

表3 受講環境についてのアンケート

授業の型	タイプ	使用ツール	授業前	授業中	授業後
オンデマンド型 (OD型)	①	紙資料 ⁱⁱ (word、PDFなど)	教師による紙資料の配信	学生は紙資料をみながら学習	学生は課題に回答 →教師のFB
	②	動画・録音資料 (MP4,MP3など)	教師による動画資料の配信	学生は動画資料をみながら学習	学生は課題に回答 →教師のFB
リアルタイム型 (RT型)	③	紙資料 (word、PDFなど)	教師による紙資料の配信	紙資料を用いた教師による解説	学生は課題に回答 →教師のFB
	④	動画・録音資料 (MP4,MP3など)	教師による動画資料の配信	動画資料を用いた教師による解説	学生は課題に回答 →教師のFB

※FB フィードバック

表4のように、配信のタイミングに加え、授業で使用するツール（ソフト）が紙媒体か動画・録音資料かでOD型とRT型はさらに2つに分けられる。授業開始当初は、OD型-②で授業構成を

考えていた。その理由は、ネット環境が十分に整っていない学生がいる場合、通信が途切れたりすると授業に参加できない可能性があることを予想していたため、録画したものであれば授業時間が過ぎた後でも見逃し視聴用に配信することができるからである。学期がスタートし、授業が開始しないと学生と連絡を取ることができない仕組みだったため、事前に受講環境についての聞き取りを行うことができなかった。従って、通信トラブルに対処する意味も含めてOD型が良いと判断し、事前に授業の構成（流れ）をあらかじめ決めて、初回の授業を行なった。初回は「授業の進め方」「韓国語についての簡単な解説」「韓国語の基本母音と合成母音（一部）」の3点について取り上げた。

しかし、受講環境アンケートの結果を受け、2回目以降からRT型-③形式に変更し、必要に応じて部分的（主に、授業内課題）にRT型-④を取り入れた折衷型で実施した。オンライン授業では主にMicrosoft Teamsを使用した。高崎経済大学は昨年までも使っていたポータルサイトに加え、今年度はオンライン授業に際しMicrosoft Teamsの使用を推奨している。資料の共有、テスト、チャット（投稿）の共有、学習履歴の管理などができるため、筆者は主にこのTeamsを使って授業を行なったⁱⁱⁱ（一部zoom使用）。

Ⅲ（２）「授業内容（目的と到達目標、教科書、回数制限など）」について

ここでは、オンライン授業に影響を与える条件のうち、内的な側面である「授業内容」に関わる授業の目的と到達目標、教科書、回数制限などの制約とそれに伴う変更の有無について述べる。オンライン化に伴う変更の有無と変更内容は以下の表5のようにまとめられる。

表5 オンライン化に伴う変更の有無と変更内容

		変更の有無	変更内容（授業実施前の予想）
① 授業概要	目的と到達目標	なし	Ⅱ（３）で述べたように、授業の根幹に関わるので変更しない
	教科書	なし	『できる韓国語初級Ⅰ＜新装版＞』（2010年、DEKIRU出版）
	授業の流れ（ARCS）	なし	対面型、オンライン型を問わず、効果的なものと思われる
	学習項目	あり	第7課～第9課は一部のみ取り上げ、残りは「ハングルⅡ」で扱う
	授業回数・時間	あり	15回から12回に、回数上は3回減る
② 評価	評価方法	あり	授業への参加度20%、小テスト・課題30%、期末試験（50%）から、授業内・授業後の課題60%、期末試験40%に変更
	テストの方法	あり	ペーパーテストはできないので、実施方法を変える必要がある
③ 教材	教材・情報・課題の提供と保存	あり	授業中に配布する資料や課題を、事前に配布しておく必要がある 配布のタイミングと方法（LMSかメールかなど）を決める必要がある
④ 後授業内課題	課題の量	あり	理解や疑問を確認するための質問をするとしても、学生一人ひとりの回答を確認することができないので、課題が増えると思われる
	課題の回収	あり	課題はLMSなどを使って配布し、回収はメールになるとと思われる

④ 後授業内・ 課題	課題の返却	あり	対面のときは翌週返却だったが、メールであればすぐに返却できると思われる（※ただし、メールを使う場合は、早い段階で韓国語の入力を教える必要がある）
	課題の効率	あり	対面のときより効率が上がるかいまのところ不明である
⑤ 教室活動	双方向性	あり	通信のタイムラグがあること、同時に複数の学習者からの返答が確認できないなど、双方向性を保つことが難しいと思われる
	フィードバック	あり	対面では、学生の様子をみて適宜フィードバックすることができたが、オンライン授業でどの程度一人ひとりの学生にフィードバックできるかいまのところ不明である
	ピア・ラーニング (ペア／グループ活動)	あり	対面では、その場でグループになって話し合いの活動ができたが、オンライン授業ではどのような方法とタイミングで、何回実施できるかいまのところ不明である
	流動性	あり	授業ツールとデバイス（個数など）に限界があるので、臨機応変な対応がしにくいと思われる

変更がないのは、授業概要の「目的」と「到達目標」と「教科書」、「授業の流れ」のみである。「目的」と「到達目標」は本授業の根幹をなすものであるため、また、「教科書」は急な変更により混乱するかもしれない学生のため変更なしとした。「授業の流れ」は従来の対面授業においても取り入れているARCSの枠組み（詳しくはIV（1）で述べる）により、学生が興味・関心を持って韓国語の授業に取り組めるように本授業で取り入れているものである。

一方、「授業概要」の回の2項目「学習項目」と「授業回数・時間」から「評価」、「教材（教科書以外）」、「授業内・授業後課題」、「教室活動」はすべてなんらかの変更を加えた。以下では主な変更点について説明する。

①授業回数の減少に伴う内容の見直しについて

学期開始の直前に、各回のシラバスを含めたコース・デザインの改訂について、高崎経済大学の第二外国語科目担当教員と韓国語担当教員を交えて何度かやりとりが行われたが、授業が差し迫る中での変更は、かえって学生の困難を招くなどの理由で大幅な変更は行わなかった。ただし、授業回数を15回から12回に変更しなければならないという外的な条件は必然であった。そこで、15回分で予定していた学習項目のうち、重要度による優先順位を考え、それらを保持しつつ授業回数を12回分にするためのコース・デザインを行うこととなった。

②評価

ペーパーテストができないので、期末テストの割合を下げて、課題の割合を上げた。

③教材（教材・情報・課題の提供と保存）について

授業中に配布していた資料や課題を、事前配布する必要があると思われる。配布のタイミングと方法（LMSかメールかなど）を決める必要があると思われる。

④授業内・授業後課題（課題の量、課題の回収、課題の返却、課題の効率）について

授業内および授業後の「課題」については、大きな変更が予想される。対面型の授業では、口頭で学習内容の理解や疑問が確認でき、ノンバーバルな情報（表情や仕草など）も含めて学生からの反応がすぐにその場でわかる。その反応の善し悪しで、理解度が高いと判断できれば追加のタスクなどを当てることができ、理解度が低い場合は再び説明等が行えるため「流動性（臨機応変な対応）」もある。しかし、オンラインでは、学生の様子は分割された非常に小さなモニター画面上でしか見えないので、学習内容の理解や疑問が確認しにくい。従って、時間をとって授業内で課す「課題」はこれまで以上に増えると思われる。

その「課題」の回収や返却は、LMSやポータルサイトを使って配布し、回収はLMSやメールになると思われるため、即時性や流動性は大幅に失われるであろう。また、音声での「課題」の回収は技術的な問題が大きいと、文字による回収が現実的だと思われる。従って、早い段階で韓国語の入力を教える必要がある。

⑤教室活動（双方向性、フィードバック、ピア・ラーニング（ペア／グループ活動）、流動性）について

この「教室活動」に関わる項目は、最もオンライン化の影響が出る部分であろう。上でも述べたように、通信のタイムラグがあること、同時に複数の学習者からの返答が確認できないなど「双方向性」を保つことが難しいと思われ、学生の様子をみて適宜「フィードバック」することもできない。利用可能なツールやデバイスにも限界があり、臨機応変な対応がしにくいと思われるため「流動性」も大幅に下がるであろう。

さらに、その場でグループになって話し合うことも難しいので、対面型の授業で多く取り入れている「ピア・ラーニング（ペア／グループ活動）」をオンライン型授業ではどのように行うかは大きな課題であろう。

IV. オンライン授業の構成-「ARCSモデル」の枠組みを用いてー

IV（１）「ARCSモデル」の４つの要因

今回行ったオンライン授業の構成は、J.M.ケラーの「ARCSモデル^{iv}」の枠組みを使っている。このモデルは、学習者の学習動意欲を高めるために、動機づけの４つの要因（注意Attention、関連性Relevance、自信Confidence、満足感Satisfaction）が重視だとしている。

一つ目の「注意（A）」は、「学習者の関心・好奇心を引き、楽しそう、使ってみたい気持ちになる」ようにするというものである。これを重視した授業では、何の動機づけや状況提示もないまま「今日は○課を勉強します」や「この文型を学びます」と授業を開始するのではなく、学習者が自分につながる文脈がイメージでき、興味・関心がわくように、「あなたなら、こんなとき

どうしますか？／なんと言いますか？」といった場面や状況を提示することから始まる。

二つ目の「**関連性 (R)**」は、「動機づけを促しつつ、親しみやすく、自分のものとして取り組みやすい」ようにするというものである。従って、学生が身近な題材と感じるもの、そのような状況に遭遇する可能性や頻度の高さなどを考慮した内容を取り上げるようにしている。

三つ目の「**自信 (C)**」は、「最初に到達目標を明確に見せ、どこに向かって努力するのかを知らせ、努力すれば成功（言葉が使えるようになる）することができる」ようにするというものである。やみくもに語彙や文型を暗記するのではなく、韓国語を使って何ができるようになるのかを授業開始時にしっかり提示し、それがぶれないように随時促している。学生も授業の最終目標が何か可視化でき、なおかつ、それに沿って授業が進んでいくため迷子になりにくい。

四つ目の「**満足感 (S)**」は、「学んだものを活かす機会があり、その結果に関しての公平な評価が得られる」ようにするというものである。従って、ペーパーテストの高得点だけがゴールではなく、学んだものが運用でき、「韓国語で〇〇ができた！」ということが実感できるような流れを重視している。これは、上の「Ⅱ（２）教室活動の特徴」で述べた本授業の中心的な指導スタンスであるTBLTとも合致するものである。

Ⅳ（２）授業の実例

ここではARCSモデルを用いた授業例の一部を紹介する。まず、「注意 (A)」や「関連性 (R)」を考慮した教科書本文の書き換え例を示す。以下の表6のように、授業では、指定教科書の本文（ダイアログ）をそのまま使用せず、学生が内容に興味を持って自分自身が当事者として意識できるように書き換えている（もとの文は韓国語だが、ここでは日本語訳を用いて説明する）。

表6 教科書本文の書き換えの例（第8回の一部）

第3課の本文（原文まま）	第3課の本文（書き換え）
<p>【前提・状況】 なし</p> <p>【本文】 マツイ：それは何ですか。 チェ：これは胡瓜キムチです。 マツイ：これもキムチですか。 チェ：いいえ、これはキムチがありません。 それはナムルです。 マツイ：おいしいです。</p> <p>【文型】 ・指示詞 ・「です（ヘヨ体）」 ・「～ではありません（ヘヨ体）」</p>	<p>【前提・状況】こんなときどうしますか。 韓国に行って、韓国食堂でご飯を食べます。 ①メニューを見る ②店員を呼ぶ ③見た目や名前でわからないものについて訊く ④食事を注文する</p> <p>【本文】 私：あのう～。 店員：はい。 私：（メニューを指差して）これは何ですか。 店員：それはジャージャー麺です。 私：これもジャージャー麺ですか。 店員：いいえ、それは冷麺です。 私：あれも冷麺ですか。 店員：いいえ、あれはチャンボンです。 私：（メニューを指差して）これ、一つください。 店員：（料理を持ってきて）美味しくお召し上がりください。</p>

一般に、初級教科書は最初に本文としてダイアログ（対話）があり、本文で取り上げている語彙の一覧とメインの文型・文法の説明が続き、最後に練習問題が載っている。初級教科書の多くが文型を中心とした「構造シラバス」で作成されていることが多く、「ハングルⅠ、Ⅱ」の指定教科書も同様である。構造シラバスは、文型・文法の習得が主目的であるため、この課でも「指示詞」や「ヘヨ体（話し言葉など親しみのある文体）」の「です」、「ではありません」という文型が学習項目になっている。本文に当該の文型を組み込みただけなので、対話する二人の関係性や、文脈、状況などについて何も書かれていない。このままでは、なんのために「それは何ですか」と聞いていて、なぜ「これもキムチですか」と聞いているのか、また、当該課の登場人物であるマツイさんとチェさんはどんな人間関係なのかなどが不明のまま、韓国語と日本語を対訳して覚えることになりかねない。


もちろん、教科書の内容通りに進めることも考えられるが、何も手を加えずにそのまま扱うこと（いわゆる“教科書を教える”）よりも、目の前の学生たちが身近に感じ、学ぶ動機づけになるような内容に変えるなどの工夫をして教える（“教科書で教える”）方が、学びの当事者である学生たちにとって言葉を学ぶ意味がより見出せ、韓国語で自分のことを表現することにつながると思われる。このように、できるだけ学習者が当事者になるようにし、自分なら何と云うか、何が伝えたいか、何を聞きたいかといった気持ちにさせること、また、現実世界で体験できるものを提示することを心かけている。

また、「自信（C）」の観点から、いま学ぶことは何かを示し、スクリプトに沿って授業を進めている。図1は実際に第8回目の授業で使用したスライドの一部である。

図1 授業スライドの例（第8回の一部）



こんどとき、どうしますか。
韓国に行って、한국 식당에서 밥을 먹어요. (食べます)。

①メニューを見る
②店員を呼ぶ
③見た目や名前で見えないものについて訊く
④食事を注文する




第8回-第3課 2

①메뉴를 봐요 메뉴を見ます
메뉴를 골라요 選びます。

第8回-第3課 3

②점원을 불러요 店員を呼びます




第8回-第3課 4

④식사를 주문해요 食事を注文します

손님: 이거 하나 주세요.
점원: 네, 잠시만 기다리세요.

または
손님: 짜장면 하나, 짬뽕 두 개 주세요.



맛있게 드세요!

～個＝～개 교과서 p.97
한 개 두 개 세 개 네 개 다섯 개 (하나)

第8回-第3課 8

ここでは、「お店で注文する」といった日常によくある行動を取り上げ、一連の動作の流れを最初のスライドで示した後、メニューを見たり、店員を呼んだりするなどを韓国語でどう言えばいいのかについて学べるようにしている。学生は最初に到達目標を見ることで、学ぶ前の自分が何がわかっていて、何が言えないのかを内省し、「学ぶべき内容＝努力すべきところ」が明確になる。何をするかわからない状態では不安になりやすいので、目的をはっきりさせることで「私もできそう！」という自信を持ち、学習を進めることができる。

最後に、「満足感（S）」の観点からは、学生が「学んで良かった、韓国語が使えた」という気持ちになるようにするため、対面授業ではペアやグループワークといった活動を頻繁に行っていた。さらに、教室内ではそれらの活動を見て回りながら、学生たちの誤用に対してその場でフィードバックを行っていた。

しかし、オンライン授業では、そのような活動は、通信環境やツール、デバイスなどの制約があり十分に確保できないため、毎回授業後課題を出すこととした。方法は違っても、身に付けたことを言ってみたり書いてみたりすることで学びが実感できるようにするためである。そして、KR情報の重要性から、課題回収後は、学習の成果が確認できるように、なるべく早く添削やコメントを返すようにした。

このようなARCSモデルの4つの要因は、これまでの対面型授業で実践してきたものであるが、オンライン型授業でも取り入れることが可能であると思われる。藤本（2019）は、ARCSの4つの要因と関わる教室活動を以下のように示している。

表7 ARCSの4つの要因と関わる教室活動（藤本2019 p.32）

4つの要因	具体的な教室活動
A注意	導入
R関連性	基本的な練習や説明
C自信	応用練習
S満足感	発話練習や自由会話、テスト

この藤本（2019）の例はARCSモデルの4要因を日本語教育に当てはめたものであるが、ARCSモデルに沿って今回のオンライン授業の手順とツールの関係を考えると、以下のようになると思われる。

表8 ARCSモデルに沿った授業の手順と使用ツール

4つの要因	オンライン授業の手順と活動	使用ツール
A注意	授業開始部（導入）	本文のリライト、スライド、PDF資料など
R関連性	説明や練習（インプット／基本的な練習や説明）	Microsoft Teamsのビデオ会議
C自信	授業内課題（新出項目の理解確認、復習）	Microsoft Formsによる課題提示と回収
S満足感	授業後課題（課題へのフィードバック）	Eメール、添付ファイルでの返信

ARCSを重視した通常の対面授業とオンライン授業とでは、大まかな授業の流れと個々の活動においては大きな違いはないが、「使用ツール」と「フィードバックのタイミング」には大きな違いがある。やはり、Ⅲ（２）でも述べたように、受講者数が40名程度のオンライン授業では、即時性のある双方向性と流動性が大きく低下してしまうことは避けられない。

V. オンラインによる第二外国語「ハングルⅠ」の教育実践例

ここでは、Ⅳまでで述べたオンライン型での、授業スタイル、授業での内容と構成、ARCSモデルに沿った手順・活動と使用ツールの関係を具体化した授業の実践例を報告しながら、オンライン型の第二外国語教育の特徴や問題点・課題などについて考えていく。

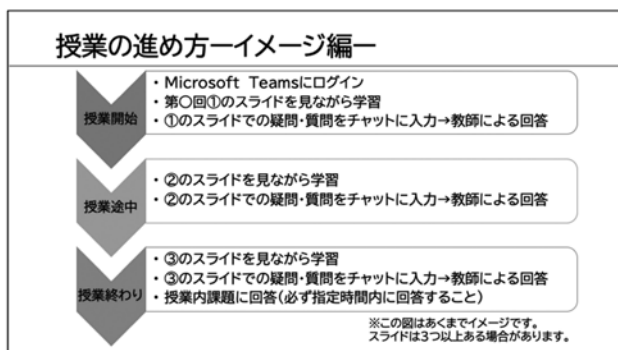
V（１）授業の構成について

初回は、表４のOD型-②（オンデマンド-動画資料）の授業スタイルを採用した（以下に再掲）。学期が始まり初回授業以降でないと学生と連絡を取ることができない仕組みで、事前に受講環境についての聞き取りを行うことができなかった。従って、初回の授業は、ネット環境が十分に整っていない学生がいることや通信が途切れるなどが想定され、通信トラブルに対処しやすいOD型が良いと判断した。OD型であれば、録画してアップロードした動画教材を授業時間が過ぎた後でも視聴できるからである。

授業の型	タイプ	使用ツール	授業前	授業中	授業後
オンデマンド型 (OD型)	②	動画・録音資料 (MP4,MP3など)	教師による動画資料の配信	学生は動画資料を みながら学習	学生は課題に回答 →教師のFB

初回の内容は「授業の進め方」「韓国語についての簡単な解説」「韓国語の基本母音と合成母音（一部）」の３点について取り上げた。以下の図２「授業の進め方—イメージ編—」は、初回に学生に示したものである。学生の受講環境の確認後に変更する可能性を考え、「イメージ編」として提示した。

図２ 初回：授業の進め方—イメージ編—



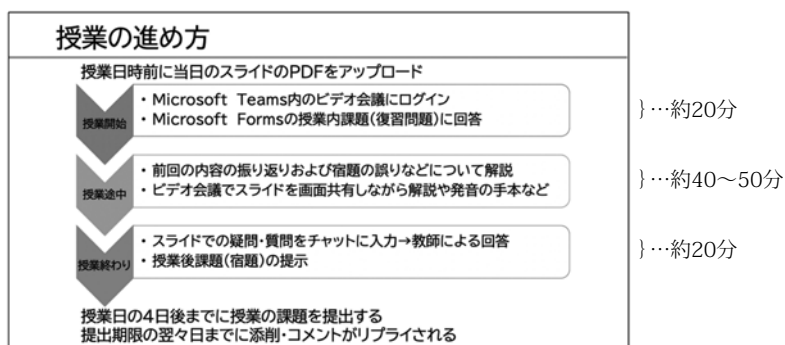
当初の授業の構成は、「授業開始」で授業へのログインから1つ目の動画とその内容についての質疑応答までを、次の「授業途中」では2つ目の動画とその内容についての質疑応答までを、最後の「授業終わり」では3つ目の動画とその内容についての質疑応答を行い、最後に当日の内容についての問題（授業内課題）に回答するといった流れだった。初めての第二外国語としての韓国語で、OD型だけで十分にフィードバックできるか不安があり、毎回複数の動画を細切れで収録・配信し、一つ一つの動画の間に質疑応答を挟みフィードバックを含めて実施することが望ましいと考えたため、実際にはOD型を中心として部分的にRT型を取り入れた。

初回の授業の最後に、Ⅲ（1）で紹介した通信環境等を含めた受講環境についてのアンケートを実施した。また、初回の授業が終わった後、学生たちに意見を聞いたところ、動画によるOD型の授業よりRT型の方が、その都度質問もできることに加え、「実際に授業を受けている実感がある、学んでいる感じがする」といった声が多かったことや、その後に受講環境についてのアンケートの結果から通信環境にそれほど問題はなさそうだと判断できたので、翌週の2回目からはRT型-③のスタイル（リアルタイム-紙資料。以下に再掲）で授業を行うことにした。

授業の型	タイプ	使用ツール	授業前	授業中	授業後
リアルタイム型 (RT型)	③	紙資料 (word、PDFなど)	教師による紙資料 の配信	紙資料を用いた教 師による解説	学生は課題に回答 →教師のFB

RT型-③は、授業前、授業中、授業後のアクションについてはOD型-②と同様であるが、使用ツールとして紙資料を事前配布しておくことと、授業をリアルタイムで行う点が異なる。従って、授業の進め方は、概ね初回のOD型-②と同様である。

図3 2回目以降：授業の進め方



授業の流れは、「授業開始」の時間になったら、ログインした人数を確認し、Microsoft Formsで作成した復習問題を配信し、回答の様子を確認した。この部分は約20分かかる。

次に、「授業途中」では、学生たちの復習問題の回答が揃うのを待ってから、ビデオ会議に移行し、リアルタイムでスライドを画面共有で見せながら解説・説明・発音の見本・練習などを行った。オンライン中なので随時疑問質問を受け付け、再度説明が欲しいところなどがあつたら

すぐにチャットなどで返事できるように配慮した。この部分は約40～50分かかる。チャットについては以下のV（3）で詳しく述べる。ほかに、なんらかの通信障害があり音声が届かないことも考えられるため、ICレコーダーを横に置き録音をしていた。授業をそのまま録画することもできるが、データが大きくなるので、できるだけ軽く済むようにした。このICレコーダーの録音は、授業中になんらかの通信障害のため聞けなかった学生のためのバックアップであり、学生からの申し出があれば配信する予定であったが、今学期の間、一度もそのようなことはなかった。

最後に、「授業終わり」で、当日の学習内容を教科書で確認し、質疑応答を行ったり、もう一度発音を聴かせたりする。この部分は約20分かかるので、これで授業終了時間になる。

授業後は、当日学んだ内容をアウトプットできるような宿題（授業後課題）を出していた。一人ひとりの発音を確認するための韓国語の語彙の録音や、少しずつ一行文から書けるような作文などである。授業後課題については以下のV（4）で詳しく述べる。

V（2）動画について

初回に短い動画を複数個作成・配信した理由は、一般に反転授業において事前学習用教材の動画の長さが7分を過ぎると動画の視聴率が落ちるという調査結果があるからである。一般的には5～10分程度にしていることが多く（藤本2019p.58）、集中力の持続に配慮することや、一つの動画が長くなればデータ量が重くなり通信障害が発生する可能性も排除できないため、事前学習用ではないけれど動画があまり長くならないように配慮した。初回に用いた3つの動画は、短いもので3分4秒、長いもので15分39秒である。メインの内容を扱う際は説明が丁寧になりがちで15分超の少し長いものになってしまったが、様子を見ながら改善する予定であった。2回目以降はRT型で授業を行なったため、事前に動画を作成する作業はなくなったが、復習や授業内課題の聞き取りは筆者が音声を吹き込んだ動画で行なった。教科書で扱われている語彙や表現以外のものを取り上げているため教材のCDをそのまま用いるよりも録音した方が使い勝手良かった。

その動画などの配信の方法について、動画配信はOD型を希望した学生のコメントにあるように「何度も聞き返したり見返したりできる」といった学習の復習には有用だが、やはり配信の仕方には十分な注意が必要であると思われた。というのも、学生がダウンロードできる形で配信してしまうと、履修修了後も個人所有していたり、許可なしにSNSなどで投稿するといった教師の著作権や肖像権を侵害する可能性が排除できないからである。現に2020年度の春学期が始まったあと、複数の大学の学生による動画や授業資料や教員の顔の投稿が相次いだ。そのようなメディアリテラシーのルールに違反しないよう注意を呼びかけてはいるが、どんな事態が生じるかわからない以上、動画をそのまま学生に渡すわけにはいかないと判断した。

筆者の動画作成方法は、主にパワーポイントに音声を録音したMP4ファイルで、文字の導入

など発音するときの口を見せる必要があるものはzoomを画面共有し、筆者が横に小さい画面に出る形にしての録音の2つである。いずれの場合もMP4のままではなく、YouTubeにアップロードした動画を限定公開に設定したものをMicrosoft Formsに貼り付ける形で配信した。YouTubeの限定公開であってもURLを教えるとダウンロードできてしまうことがあるので、個人所有できないようにFormsに貼り付けるといった二段構えの対策を取った。

各動画の下に確認問題などのクイズを入れ、しっかり視聴できているかを確認できるように作成した。Formsを使うと、閲覧や回答の様子がすぐにTeamsで確認できるため、学生が授業時間に参加できているか随時確認でき、問題の回答をみてすぐにフィードバックもできるなど利点がある。回答制限によって一度回答してしまうと後で動画の閲覧ができないので、復習用になるような動画は数週間の間のみ掲載するようにした（YouTubeの限定公開設定の動画をFormsに貼り付けてアップロード）。

V（3）授業中の工夫について

多くの学生がカメラをONにして顔を見せることをしなかったため（強制もしていない）、Microsoft Teamsのビデオ会議で授業を行いながらチャットを多用することになった。顔を見せることを強制しなかった理由は、自宅の様子や音などが聞こえるなどのプライバシーに配慮したかったのと、履修人数が多く一人ひとりの学生をきめ細かく見てあげられないこと、授業回数が減ったことで授業内容も詰まっているなど授業の実施上顔が見えなくても問題ないと判断したからである。

初回から授業中のやりとりは基本的にチャットを利用した。Teamsのチャットでは、絵文字も使えるため、簡単な確認（ここまでよろしいですか）といった問いかけに「👍」「😊」などで反応してくれることが多く大変便利だった。

語学の授業はできれば15名以下であることが望ましいが、仕組み上、変更することは叶わなかったため、40名定員で実施するしかなく、学生とのインタラクションを十分に行うことはできなかった。これは対面授業の際も定員の多さでなかなか難しいと感じる部分だが、教室であれば周りの学生たちとやり取りするようにグループワークで対応したりしていた。しかし、オンライン授業ではzoomのブレイクアウトルームでも使用しない限り学生同士の対話の練習ができず、現在のTeamsの仕様上いたしかたない部分でもある。この授業は韓国語の初級（ハングルⅠ）で、数回の受講で話せるようになることは難しいレベルでもあったため、6回目の授業で初めてzoomのブレイクアウトルームを設定し、4～5名のグループに分かれて韓国語で話すというアクティビティを入れた。5回目までに学んだ自己紹介や家族紹介（自分の名前や学年、所属学部や学科、家族の構成員や人数、職業など）を少なくとも3名に聞くといったものである。Teamsからzoomに移動する際に手間とったりはしたが、学生の反応も概ねよく、韓国語の練習になったとの感想が出ていた。

V（４）授業後の工夫について

授業後は毎回授業後課題（宿題）を出していたが、初回を含めて授業の前半の数回は主に音声（発音）を確認するためのものであった。ハングル文字を正しく読めているかどうかをみるため、自分の音声を提出させていた。最初は文字そのもので、その後に単語、文になるように配置した。スマートフォン（以下、スマホ）やパソコンなどでの録音と提出方法を教えたが、みんなが使っているデバイスによってデータの形式がバラつき、ファイルを開くことが難しいものもあった。そこで取り入れたのがオンラインボイスレコーダーのvocaroo^{vi}である。これはオンライン上で録音すると、一つのファイルとしてURLが発行される。URLをメールに貼り付けて提出することができ、メールの履歴を辿ればあとで聞き直すこともできる。スマホなどに保存していつの間にか消してしまう恐れもなく、添削・コメントする側としても大変使い勝手がよかった。

韓国語の文字（ハングル）は初回から４回目までで指導が終わったので、少しずつ目で読むことはできるようになってきていた。全てのハングルの子音・母音などを学んだ後である４回目に、自分の名前をハングルで書いてみるという宿題を出した。近年、文字を手で書くことも減っているので、手書きではなくキーボードで入力できるようになることを目指し、韓国語キーボードの配列の２ボル式の入力の仕方を紹介した。韓国語のキーボードの配列は複数あるが、２ボル式はスマホでもパソコンでも同じ形で最も入力しやすい。４回目の宿題は４０名中３７名が提出しているが、２名のみ手書きしたものを写真に撮って提出していた。翌週からは宿題提出者全員が韓国語キーボードで入力することができるようになっていた。ほとんどの学生がスマホで入力すると答えていたがその理由は、日本で購入したパソコンのキーボードにはローマ字と仮名しか書かれていないのでキーボードにハングルのシールなどを貼り付けるなど工夫が必要であるためである。韓国語の分かち書きや綴りミスなど正書法に誤りはあるものの、スマホで入力しメールで送ってくれることで、添削してすぐに返すことができ、添削された紙を無くすこともないといった利点もあった。いままでの対面授業では手書きの紙を添削していたが、オンライン授業での取組でこんなに早く入力できるようになったことは大変な驚きとともにもっと早く取り入れていればよかったと反省しきりであった。今後の授業でもぜひ取り入れたい。

VI. まとめ

最後に、これまでの議論を振り返りながら、オンラインによる第二外国語教育の可能性と課題についてまとめたい。これらは、Ⅲ（２）で取り上げたオンライン授業に伴う変更点についての予想①～⑤と対応するもので、授業実践を経て変更したことや明らかになったことである。

①授業回数の減少に伴う内容の変更について

授業回数の３回分の減少はあったが、この課で扱う予定であった教科書７課、８課、９課の語

彙や表現、文法の一部は、1回目から12回目の内容に随時取り入れることができた。7課と9課での活用の作り方などは、例年一度学んだだけではなかなか定着しないので、「ハングルⅡ」に進んでからもう一度詳しく扱うこととした。一方、本文のリライトによって各課のテーマを変更したことで、その場に合った言葉（言語項目）を後回しにせず取り上げることができたのは評価できるように思う。

②評価

期末テストは、ペーパーテストからMicrosoft Formsでの選択式問題への回答に変更した。設問の数を多くし、回答時間を短めに設定するなどのカンニング対策を行った。

③教材（教材・情報・課題の提供と保存）について

プリンターがなく、使用デバイスも1つしかない場合もあることを考えて、まず授業日前に当日に写すスライドをPDFにしてLMSに配信した。授業中は画面共有で見ることができ、授業後もLMSで確認、ダウンロードもできるので、予習や復習の際にも問題なく使用している様子がわかった。授業中に手元に事前配布の資料がなくても自分のノートなどにメモするように促したが、学生は必要に応じて写真などで保存している可能性もある。

ハングル文字の習得が終わった後からは、韓国語の本文や語彙、表現などにあえて日本語訳を付けずに配信し、授業中にスライドで見せ、授業後に日本語訳が埋まっているものを改めて配信した。課題も授業スライドのPDFにも書いてあるが、別途「宿題」のフォルダを作ってアクセスしやすいように配慮した。自習の際には教科書の出版社で配信している動画や、パソコンやスマホで使うことができる韓国語の辞書や翻訳アプリなどを紹介し、自律学習できるように促した。

LMSを使うことで、心配していた以上に簡単に教材や情報、課題の提示、共有ができたので、対面授業に戻った際にも積極的に使っていきたい。

④授業内・授業後課題（課題の量、課題の回収、課題の返却、課題の効率）について

予想していた通り、課題の量は増えた。学生たちの反応が確認しづらいため、授業内・授業後課題の2つをほぼ毎回課し、定着の度合いをみたり、フィードバックのポイントを探ったりした。

一方で、課題の提示がしやすく、回収、返却も簡単に行うことができた。課題の提示はLMSに配信し、回収は授業内課題はLMSで、授業後課題はメールで行った。前者がLMSなのは授業時間内に行う簡単なクイズ問題であるためで、授業開始直後にMicrosoft Formsで配信し、その場で解答してもらった。この方法だとほぼタイムラグなくweb上で確認することができる。一人ひとりにコメントを返すこともでき、点数も可視化されるので学生たちの動機づけにもなったように思う。授業後課題は主に韓国語を録音した音声ファイルか作文だったので、メールで出してもらっ

た。メールなのですぐに返信することができ、メーラーを使えばHTML形式で赤ペンなどを入れることもできたので大変便利だった。課題が増えた分教師側の負担も増えたが、効率的に行うことができたので、今後も積極的に使っていきたい。

⑤教室活動（双方向性、フィードバック、ピア・ラーニング（ペア／グループ活動）、流動性）について

オンライン授業になって、最も変わったところは「教室活動」に関わるものである。教師と学生たちの間ならどうにかチャットなどを使ってやり取りをすることができたが、学生同士の活動はほとんど取り入れることができなかった。人数が多く、ペアやグループでの活動を設定したとしてもそれをファシリテーションしながら見守る余力がなかったのも一因である。zoomのブレイクアウトルームの移動も思っている以上に時間がかかり、授業時間がどんどん短くなってしまったため、1度しか取り入れていない。

対面の授業であれば、授業の流れの良いタイミングで、学生たちの様子を見て、すぐにピア・ラーニングが取り入れられる強みがあったと改めて感じた。講義ではなく語学であるからこそ人と関わりながら学ぶということの必要性を強く実感した。

◆「第二外国語」教育・学習の持つ意義－「使える第二外国語」を目指して－

最後に、オンライン型／対面型を問わず、「第二外国語」教育・学習の持つ意義について述べてみたい。中高も含めた英語教育では、「使える英語」などといった表現がよく聞かれ、もちろん大学でも実用的な英語教育がますます重視されるようになってきた。しかしながら、いわゆる第二外国語では、「使えるドイツ語」や「使えるフランス語」などのような表現があまり浸透していない（相対的に受講者の多い「中国語」と「韓国語」ではわずかだが実用性についての議論も聞かれる）。学生側からすれば、「第二外国語は、どうせ使えるようにならないから、単位を取るために履修する」という思いもあるのかもしれない。

しかし、筆者は、到達目標の設定や授業内容・教室活動・教材などの工夫で、総学習時間数が少ない第二外国語教育でも、十分に「使える第二外国語」を身につけるための授業が可能であると考え。CEFRの提唱する複言語主義・複文化主義に照らし合わせても、いくつかの言語で部分的にでもA 1レベル程度の能力が持てるようになれば、真の意味でのグローバル化につながるのではないだろうか。

（やん じょんよん・群馬県立女子大学地域日本語教育センター専任講師／
高崎経済大学非常勤講師）

【参考文献】

- 稲垣忠・鈴木克明・編著（2011）『授業設計マニュアル 教師のためのインストラクションデザイン』, 北大路書房
- 田原憲和・編著（2019）『他者とつながる外国語学習をめざして 「外国語学習のめやす」の導入と活用』, 三修社
- 當作靖彦・中野佳代子（2012）『外国語学習のめやす 2012高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』, 公益財団法人国際文化フォーラム
- 藤本かおる（2019）『教室へのICT活用入門』国書刊行会
- 横山吉樹・大塚 謙二（2013）『英語教師のためのフォーカス・オン・フォーム入門 成功するタスク&帯活動アイデア』, 明治図書
- R.M.ガニェ, W.W.ウゼイジャー, K.C.ゴラス, J.M.ケラー著／鈴木克明, 岩崎信・監訳（2007）『インストラクショナルデザインの原理』, 北大路書房

- i 本稿では「韓国語」「ハングル」の2つの名称が使用されているが、高崎経済大学の科目名は「ハングル」であるため、言語の一般名称としては「韓国語」を、科目名としては「ハングル」を用いる。
- ii ここでいう「紙資料」は印刷できるものを指す。
- iii 5月の学期初めの前に高崎経済大学の第二外国語科目担当教員およびキャリアワーキング研究オンラインシリーズ担当教員による講習やデモレクチャーを受講した。質問に丁寧に対応してくださった高崎経済大学の先生方に御礼申し上げたい。
- iv ARCSモデルは、アメリカの教育工学者J.M.ケラーにより1980年代に提唱されたもので、学習者の動機づけを考える際に問うべきいくつかのポイントが示唆されている（稲垣・鈴木2012, 112-116）。ARCSモデルは、授業や教材を魅力あるものにするためのアイデアを整理する枠組みで、やる気にさせる授業・教材づくりをしたい時にどこの問題があるかを把握し、具体的に考えることができる（藤本2019, 29-33）。
- v【前提・状況】の部分のみ日本語で書いて、また、口頭でも伝えている。
- vi オンラインボイスレコーダー <https://vocaroo.com/>